

マドリー地名考

一色忠良

カルロス一世 (Carlos I) からその子フェリーペ二世 (Felipe II) にかけての82年間 (1516~98) の治世は、その本国のほかにオーストリア、ベルギー、オランダ、イタリア、ドイツの西南部、さらにはクリストバル・コロン (Cristóbal Colón) に続く探険家たちによって、メキシコ以南の中米とブラジルを除く南米、カリブ海諸国などを版図とし、イスパニアは、近世初頭のヨーロッパ史上にいまだかつてない繁栄を見、文字どおり「イスパニア人の領土に太陽の没することのない」 (No se pone el sol en los dominios del español.) という絶対主義的国家の偉容を誇示したのであった。

近世のマドリー (Madrid) は、このフェリーペ二世の創建にかかる。

性陽気なその国民をおのが意思の下に収め得たこの勤勉にして善良なる国王は、そこに王宮を建てることを望んだ。由来その地は、寂寥の人フェリーペ二世にとって、恋慕の地であったのである。新しき首都は、彼の心を楽しませずにはおこななかったに違いない。かつてはフェニキア人による植民の根拠地であったカディス (Cádiz) をはじめセビリャ (Sevilla)、アルヘシラス (Algeciras) など、富裕なる海岸諸都市の多くをもっていたイスパニア自身にとっても、それはひとつのインスピレーションであったろう。

その後においてマドリーは、1766年の政府に対する民衆の叛乱、1793年の対仏宣戦布告、1808年5月20日のナポレオン占領軍に対する市民の果敢なる抵抗、1820~23年の間のフェルナンド七世 (Fernando VII) の圧政に対する叛乱の場となり、さらにマリーア・クリスティーナ (María Cristina) やイサベル二世 (Isabel II) の治世にあっても、自由派と保守派の抗争の舞台となり、今世紀に入つては、1936~39年の間の内乱において、ミアーハ (Miaja) 将軍の指

揮下に人民戦線側の精力的な抵抗が続けられ、カタルニャ (Cataluña) の陥落後も降服をがえんぜず、他方フランシスコ・フランコ (Francisco Franco) の麾下エミリオ・モーラ (Emilio Mora) 将軍に「圧倒的勢力をもってわが四軍団は首都に迫っており、マドリー市内には他の一軍団がわが軍に呼応して作戦を援助しつつあり。」(Cuatro columnas se dirigen arrolladoramente sobre la capital y dentro de ésta contamos con una quinta columna que facilitará nuestra labor.) の言葉を残せしめたごとくに、この地は人民戦線の最も頑強な拠点として戦われたことは、いまだに内外世人の記憶から消えないところである。

フェリーペ二世がこの町の建設に力をつくしはじめた1560年には、人口わずか2万5千であったものが、1600年には10万、1860年には29万8千、1920年には75万を数え、現在では161万に膨脹しイベリア半島第一の近代的都市に成長している。

いったい中世紀以前には半島の中央部分は荒蕪の地であった。熊が横行し、やまももの密生していたマドリーの地を、いま地理学的に案ずれば、イベリア半島のほぼ中央に位し海拔730メートル、ゆるやかな起伏をなす高原の上にあるこの都市は、北に2千5百メートルのグェダラーマ (Guadarrama) の山脈を望み、樹木のない単調な乾燥地帯を形づくる。

その高度と乾燥とによって気候は極端を示し、気温の日変化、年変化が大で、夏季に塵埃の風が高原から来るときはことに酷暑を覚え、日中の気温が38度に上ることもしばしばであり、夜は夜で冷えてくると、その日較差が30度に及ぶことすらある。冬季はグェダラーマ山脈から吹きおろす刺すような風で、相当寒冷の日もあるが、日光は大体豊か。

マンサナーレス (Manzanares) 河の北東の丘陵地にひろがる市街は、南北に長い矩形をつくる。古いマドリーの面影をよく偲ばせているのは、南西部のプラサ・マヨール (Plaza Mayor) 街附近で、高いカスティリア風の邸宅には木柱に支えられた露台があつて、その蔭を人々が往来しているといった風である。現在では中央と北部の新しい地区には、広い道路と最新式の建築が美しく建

ち並び、かつての町の城壁のあとは、1868年につくられた広い遊歩道となっている。町の中心はプエルタ・デル・ソール (Puerta del sol) で、美しい街路がそこから東へのびる。市街の東端には、壮麗なレティロ (Retiro) 公園が控えている。近くのプラード (Prado) 通りには、知らるごとくヨーロッパでも有数のコレクションをもつ立派な国立美術館があつて、ベラスケス (Velázquez), ムリーリョ (Murillo), ゴヤ (Goya) をはじめ数多くのイスパニアの生んだ名匠の作品を展覧に供している。

このマドリーは、果していかなる存在であろうか。手もとの Larousse の辞書に頼るも、「その古い創建については、正確には何ら知られるところがない」のである。

フェリーペ二世によってここに首都が置かれる前はというと、12世紀のはじめ、アラゴンのラミロ二世 (Ramiro II) にはじめて占領せられ、14世紀初頭にはレオン王アルフォンソ十一世 (Alfonso XI) に完全に支配されており、1473年にいたって宗教会議がここで開かれ、パビーア (Pavía) のフランス敗退後1525年にはフランシスコ一世 (Francisco I) を捕虜としてこの地に留めて条約調印まで釈放しなかったことなどが、歴史的にこの地の名を記憶にとどめさせている。フェリーペ二世のあとを継いだフェリーペ三世 (Felipe III) は、いったんバリャドリー (Valladolid) に首都を移したのだが、1605年には再びこの地を望んで遷都している。以来マドリーは、ながくイスパニアの芸術および学問の中心ともなってきたのである。

イスパニアにおける首都マドリーの意味とともに、その集落形成の過程も内外の学者たちによって調べられてきているが、マドリーの意味および存在はその名と不可分ではありえないので、マドリーの地名の起源については、ことに今日までその方面の専門家たちによって熱心に探究されてきている。13世紀において早くも Macherit とよばれていたその名を maior の音から思いついて Maioritum なるラテン語が考えられている。しかし、この地名探究に熱度が加えられたのは、何といても、マドリーが首都に定められてから後のことで、国土回復戦争後イスパニアの地に残留して改宗したモーロ人に関連するところ

から、当時アラビア語源の詮索がおこなわれたが無益に終わっているのである。

18世紀に入って、レバノン地方出身の学者カシーリ (Casiri) は、Macherit はアフリカ音を示すものと云い、また Macherit は真正のアラビア語にあらずとする東邦語関係の学者もあって、一時論争があったようである。今世紀に入ってから、ついに何人もそれがどこの言語に由来するかを論ずるものではなく、ただわずかにドイツから、Madrid はゲルマン人士の名前であるとか、またアテネ方面からは、ギリシャ語源説の情報がもたらされているに過ぎない。

以上のような興味と歴史を背景とするこの地名について考慮をめぐらすとき、イスパニア言語学会の創始者でその方面の耆宿たるラモン・メネンデス・ピダル (Ramón Menéndez Pidal) の見解をたださないわけにはいかないのだが、彼は Madrid は「大きな渡しあるいは橋」を意味するケルト語の混成語名詞 *magetoritu* から由来すると説明している。しかし、彼が、このマドリーの地名詮索の問題はただに難事というにとどまらず、今日までのところほとんど絶望的に思われる、と随処でもらしているところから推測すれば、彼の説も全幅的な信は置きえないことのようなのである。その後マヌエール・ゴメス・モレーノ (Manuel Gómez Moreno) なる学者がはじめて語尾の *it* に注意を向け、多くの地名例を考慮に入れた結果、イスパニア語の名詞 *mediodía* (=sur) を思いあわせている。

上記マヌエール・ゴメス・モレーノの所説があってから、イスパニアの首都の名を解明せんとする好学の意欲をあらためてかき立てられずにはおられなかった学者にハイメ・オリベール・アシン (Jaime Oliver Asin) がおり、しばらく独考研究ののちその概要を発表し、さらに著述にあたっているが、その後は反論も新説も見あたらないようである。彼は、マドリーはすなわち *madre* (母) なりと考えるが、次にそのあらましを若干の説明を加えつつ示して見たい。

マドリーの名を考究していく場合、西ゴードすなわち、西暦前300年ごろダニューブ河西岸から起って南下し、5世紀のはじめイベリアに侵入してトレード (Toledo) を首都に王国を建て、711年アラビア人に亡ぼされた、かの民族の支

配以前に溯る必要はない。なぜなら中核都市としてのマドリーは、それ以前には明かに存在していないからであって、往時その地にあったものは、マンサナーレス (Manzanares) 溪谷に沿うて展がる散在せる集落にすぎなかったのである。また、文献的にも語源的にもマドリーがケルト族の都市であったとはむろん思えないし、建築上からもそれが純粹にローマ系のものである節もない。ただ確実なことは、西ゴード時代に、われわれが今日呼ぶ旧市 (antiguo Madrid) のなかに、町の中核があったということである。その後にくる回教徒による都市は、実は、彼ら征服者がすべてそれを残したわけではないのであって、初期集落の拡大の上に、回教徒たちが強大な城市をつくっていったのである。そこでマドリーの問題は、西ゴード時代につきるのである。

先ず、市の周辺の集落に眼を向けると、それらは、あるいは平原にあり (Aravaca)、あるいは凹地にあり (Húmera)、あるいは山麓にあり (Hoyo de Manzanares) で、さまざまだが、なかんづく地名について Valdebeba, Valdepiélagos, Vallunguera, Valdelatas (Valle de leñas の意味), Valnoquerál などをはじめ Valle (谷) に関するものが非常に多く、市中に及ぶと、Vallehermoso, Valverde, Valnadú などがある。別に Navalagamella, Navalafuente など nava (山間の平原) に関するものも存在する。往古マンサナーレス河畔には、分散して狩猟家や家畜の飼育者たちが住んでいたが、漸次彼らが群居するにいたると、定着をやめて、あらたに庇護の場と水を求めつつ谷間や山間の平地や斜面の中腹に移っていったのであった。

旧市 と呼ばれる地域のうち、Alcázar および Las Vistillas の両丘陵の高さが戦略的地帯として恰好だとすれば、その間の小谷のみが湿潤の場所となる。Alcázar 界隈がマドリーの最初の地点であったことについて、歴史家たちの口が一致しているようであるが、時代的に錯断もあるやに思われる。

ここで、ひろく他の場所に眼をやるとき、溪谷、水流に係る地名が、常に河川と恰好な距離で存在していることに気づく。Vallecas は La Gavia 河の支流の分岐点に、Villaverde は Butarque 河の沿岸に、Carabanchel は Prado Longo 河の支流の分岐点に、Sumasaguas と Húmera とは Antequina 河の

上流に、また Pozuelo も同じ河の沿岸に、それぞれ所在しており、これをマドリーについて云えば、前述の Alcázar, Las Vistillas 両丘陵の間にある現在の Segovia 街の小谷と推定されるのである。

都市の発展化に伴って消滅した支流についてここで触れねばならないのだが、それは13世紀に Sant Pedro と呼ばれていた流れのことで、その流れの長期にわたる浸食の結果、上記の小谷が形成されたものであり、賢王アルフォンソ (Alfonso el Sabio 1221~84) が、現在のサン・ペドロ教会のすこし上手の前記流れの起点近くにあった鉱泉を市に贈った史実もあって、十分に裏づけうることである。したがって、初期マドリーの基礎は、この小支流であって、マンサナーレス河に沿う他のすべての集落の場合も同断である。由来、水路がその流域に住む住民にとって生活の源泉と思われるさい、イベリア半島では、matriz すなわち madre de agua (水源) という観念が生きてはたらいっていたものであって、これにふさわしい地勢をマドリーがそなえていたかどうかは、十分に検討される必要があるのである。

ついでに、マドリーという他の地名に眼を移すならば、ベルセーオ (Berceo) に Madriz があり、サントンデール (Santander) には La Madrid があって、前者は水源地の周辺、後者は水源地より出る小川の兩岸にわたって所在していることが知られる。また、ブルゴス (Burgos) 地区にも Madrid があって、これも同地にある二つの水源地からくる水が相合して形成された小川の附近に位置している。もう一つ、アルメリーア (Almería) にも Madrid があって、これも前記とおなじ地況に在る。z で終るものでも、また、d で終るものであっても、これらの地名は、あとから首都 Madrid の影響をまぬかれず、ともかくも、mtarīce (lat.) なる呼称に由来するものと思料される。発音上の符合や音声上の一致は、本論においてはそのまま原因になることが考えられないのは当然で、したがって、首都の地名と上記各地のそれとは、直接的な関係にはなく、いわば、姻戚関係にあると云えよう。なお、Madrídejos という地名も各処にあるが、これも発生原因は軌を一にするもので、matrīce の示小辞の複数に d の付いた Madrídejos が、首都名の影響で、Madricejos にかわったもの

である。要するに Madrid と Madriz, La Madrid, Valmadrid, Madrideoj などとの間の関係は、ただ単なる同意味の地名というのではなくて、それらは、もともと同じ地勢上の特長に暗示されて名付けられているまでで、起源を等しくするわけである。語尾の d については、まだまだ回教徒による占領時代の歴史の研究にまたねばならぬことは云うまでもない。

アラビア人のイベリア支配は、西暦 711~1492 年の 8 世紀にわたっている。キリスト教徒のイスパニア人の一部は、その国土が征服されるやいなや、国土回復 (Reconquista) の運動を起したのであったが、イスパニアの中世社会は、このようにして、アラビア人による支配と国土回復運動の抗争のなかに形成されていくのであるが、ここで、アラビア人の支配下にあった当時の軍事的ならびに文化的環境から、このマドリーを考えてみたい。

山脈の彼方にあったキリスト教徒に対する砦として、これを維持することに向けられていたマドリーの意味の重要さから眼をおおうわけにはいかないもので、当時イスパニア各地から実に多くの回教徒たちが集められていたのである。この地から北、山岳地帯に向った彼らも、山中でキリスト教徒たるイスパニア人たちの巡察隊に出くわすようなこともしばしばあったことと想像される。

しかし、他面、マドリーは重要な文化的中心として育っていたことも見逃せない。ここに著名な法学者や数学者も多数生れ、かつ成長しているのである。文化的中心といっても、マドリーの場合、常に宗教的、軍事的な生活につながりを持っていたのであって、たとえば、キリスト教徒に対する戦いにたおれた戦士たちの祭祠が行なわれたり、戦いを開始するにあたっては、彼らの聖戦を意義づけるためにも、諸々の資料の読書や註釈や講義のために、有数の外国人も数多くこの地を踏んだのであった。

征服されたキリスト教徒およびユダヤ人たちは、回教徒自身の教典の先駆と見なしている同じ聖書の信奉者として、彼ら自身の信仰、法律および慣習を維持していたし、もし彼らが望むものなら、回教を受け入れることによって、免税も可能だったのである。キリスト教徒の主人に任える農奴や奴隷たちは、回

教の信者になることによって自由の身をも得ることができたのであった。階級の上下を問わず、改宗者が続出した。そして、彼らは、両民族の文化の仲介という歴史的にすこぶる意義のある役割を果たすことになるのである。回教徒は、「将来アラビア人になる人たち」というアラビア語にちなんで、こういったキリスト教徒を、モサラベ (mozárabe) と呼んでいた。また一方、回教徒も、しだいにイスパニア化されていったことも、いうまでもない。回教徒とキリスト教徒およびユダヤ人との間に混血がおこなわれ、両者の思想、観念が交流する結果、イスパニアの回教徒は、その時代における最高水準の文化を現出したのであった。灌漑および米、砂糖きびなど新しい作物の導入により農業はすばらしく進展した。新しい品種により畜産業も改良され、新規な方法の採用によって鉱業も進歩し、工業もまた著しい発展を見せたのであった。都市という都市は繁栄し、すべての階級の人々が生活を享樂した。10世紀における回教国王の歳入は、今日の2千万ドル (72億円) と評価されている。ロンドンやパリが、いまだ小都市にすぎなかったころ、コルドバ (Córdoba) には、すでに舗装道路がのび、水道が完備され、20万戸の家屋が立ち並び、600におよぶ回教寺院、900もの公衆浴場および40万冊に達する蔵書を有する図書館があり、一時は50万を越す人口を擁していたものである。

マドリーは実に当時の前線集落の一つであり、その中心的存在となったのである。が、この町が認められてその成長をはじめたのは、13世紀以後のことである。1309年にはフェルナンド四世 (Fernando IV) によって国会の場所に定められ、しだいに政治的重要性を帯びてくる。16世紀、フェリーペ二世時代には、すでに首都的性格は不動のものとなり、断然イベリアの他の諸都市を圧倒していたのであるが、この地がフェリーペ二世によって選ばれたのは、地理上国土の中心的位置にあったこと、地方貴族の勢力圏外にあったこと、それに附近によい狩猟地があったことなどが考えられる。

以上に述べた環境下にあったマドリーは、前に指摘したとおり Segovia 街が拡がって形成されたもので、その中心部は回教徒たちによって小谷を形成していた二つの坂が盛り上げられ、Las Vistillas, Alcázar 両高台の高さに

はさまれて、そこは守備に絶妙な地勢となった。元来が無防備のままの集落ながら、その戦略的環境は十分に要塞にかわる条件を備えていると、征服者たちが考えたことが肯かれる。

南にアラミン(Alamín)を、北にタラマンカ(Talamanca)をおさえ、マドリーはその理想的地勢から、ハラーマ(Jarama)およびエナーレス(Henares)をとおって、トレード(Toledo)からメディナセーリ(Medinaceli)への難道の防衛線上の基点となるにいたった。西ゴードの一寒村から強大なる要地になる素地を、マドリーは十分に持っていたと見るべきで、9世紀の後半に、ムアマッド一世(Muhammad I)によってそれが着手されたころのその地は、すでに次の様相を示していた。すなわち、アルカーサルの高台を占めていた彼らには、アルムダイナ(Al-mudaina——今日のAlmudena)という城郭があつたのである。その名はmadina (esp. ciudad)のアラビア語の示小辞で、今日の王宮の場所からセゴビア街の谷の入口のところまであつたものである。城内には領主の居宅があり、主として軍事的性格をもつた集落の中心があり、また、あとでサンタ・マリーア(Santa María)の教会となる回教寺院も存在していたもので、上記の城郭を、中世紀のキリスト教徒たちが復興してつくったものが今日、城壁の一部として残されていることは明らかである。(ハイメ・オルベール・アシンは、その協力者たる友人のフリーアン・ヒメーノ・モーヤとともに、Viaducto附近の台地にその跡を認めたと報告している。)

城市には四つの入口があつた。モーロ人の門(Puerta de Moros)、蛇の門(Puerta de Culebra)、別名開かずの門(Puerta Cerrada)、グダラハラの門(Puerta de Guadalajara)およびバルナドゥーの門(Puerta de Valnadú)がそれである。別にまた、野外に通ずる出口を一つもち、それはアルベーガの門(Puerta de Alvega)と呼ばれていた。市部に通ずる通路にももう一つあつて、16世紀末までアルムデーナの門(Arco de la Almudena)の名で呼ばれていたものだが、それは今日のマヨール(Mayor)街のあるところと推定される。門から門へ、街を横切つてできたマドリーの集落は、35ヘクタールで、トレードの106ヘクタールよりも遙かにせまく、サラゴーサの47ヘクタールよりも、

やや小さいものであった。

さて、回教徒による占領時代のマドリーの周辺の風物はどんな具合であったかといえ、それは今日と違って鬱然たる繁みにおおわれていたことは疑いを容れない。回教支配のイスパニアでは、他の諸都市でも同様だが、都市の中核部から外部への逃げ道をもっていて、都市の郊外には随処に果樹、樹木、草花などにかこまれた耕地や別荘の類があったようである。マドリーにあっても、特に中央から東部および北部がそうであった。中世紀のマドリー界隅の地名を考えるさい、 *almunia* (esp. *huerto* 植込み) というアラビア語の典型的地名が存在することに気づく。

こうして回教徒たちが都市周辺の随処に付けた地名は、後々の市の特別法の中まで見出せるもので、*casa de campo* (別荘) といイスパニア語の云い方も、もとはといえ、ここから出た訳語なのである。だから、市内外の各処の地名には、回教徒占領時代の繁みを偲ばせるものが随分にあるのであって、植物に関するものが多い。たとえば、*Olivo* (オリーブ)、*Parra* (ぶどうづる)、*Saúco* (にわとこ)、*Almendra* (はたんきょう)、*Álamo* (ポプラ)、*Olmo* (にれ)、*Rosal* (ばら)、*Granado* (ざくろ) などがあり、また *La Guindalera* (みざくら畑)、*Huertas* (果樹畑)、*Jardines* (庭)、*Siete Jardines* (七つの庭、今日の *San Vicente*) などの名も見られ、事実、近世までそれらの土地には、種々の樹木が生育していたものなのである。

ここで問題になるのは、これらの樹木の繁茂と水の関係で、マドリーの高度では、常時泉水も流水もなかったからである。この水は、実は、泉から湧出するものではなく、地下水をとらえて導入する、ある特異の技術によって得られたものであったのだが、これについては後述する。ともかくわずかながら地下水がそのまま得られたのは、ただ高原の断崖部においてに過ぎなかつたのである。昔、この地には、アブロニガール (*Abroñigal*)、カニリェハス (*Canillejas*)、アラーミーリョ (*Alamillo*) の三つの流れがあつて水を供給していたとする説もあるが、それは、猛雨のあとに限られたことがわかるのであって、架空のことに過ぎない。ともあれ、もともと不毛の高原に集落が形成され

るということは、水の供給という根本的な問題を除いては考えられないことで、古代わが出雲民族が好んで海辺や潟や湖の沿岸を選んで居住していたことを想起するまでもなく、文化の進んでいる地方にあつては、地味がよくて多くの農産物ができるところ、水害を避け得てしかも飲料水のあるところに集団する。高原や砂漠では、地下水の得られるところが唯一の集落の所在地であつたことは、地理学の教えるところである。

マドリーの場合も、創建者たちが、いかにこれを解決したかが説明されなければ、納得し難いであろう。そこで先ず念頭にうかぶのは、*norja* と称する水揚げ水車がアラビア人たちによってこの地にもたらされたことであるが、それはアラビア語で *naora* と云つたものであつて、マドリーのキリスト教徒たちの最初の資料によって、これを証することができる。この *norja* は、現に19世紀半ばころまでも残されていたもので、至極時代的で、かつ絵画的な特長と印象を、この首都の風物に添えていたもので、今日モロッコの都市などに見られるものと同じものが、以前は市内の風呂屋にまであつたものである。しかもこの *norja* を以てしても、マドリーの水の問題はいまだ了解し難い。というのは、この深い穿孔を要する器具によつても、周辺の灌漑にこと足りる水量が得られたとは考えられないし、飲料水についても同様だからである。

首都および周辺の需要に見合う水の問題は、実際には非常に巧妙かつ珍奇な別な手段で解決されていたものである。だから、回教マドリーを創建し、中世および近世のキリスト教マドリーを発展させることができたのも、そのお蔭によつたものと云つてよいのである。しかして、この給水の方法は、東方から伝えられたもので、最初はイラン高原、後ではすべての回教国で、砂漠の平原に都市が建てられるような場合に、すばらしいオアシスや植込みがつくられるのに役だつたものである。このシステムは、アラビア人の移住するところにしたがつて漸次伝播していったもので、遠くアジアおよび北アフリカに及んで、それが存在していたことはいふまでもない。

回教世界でおこなわれていたこの地下水を引く方法は、きわめて古くからあつたもののようで、往古すでにヘロドトスは、ペルシャ人が戦闘にさいして、

黒海の北部にあったシシア人を追跡するのに多くの井穴が障害となっていたと語っているところからも察せられる。ローマ人も、ペルシヤの地でそれを知っていたらしいが、その伝播普及は、もっぱらアラビア人に負うものであった。このシステムは、ペルシヤでは *qanāt*, アラビアでは *fakir* または *kizama*, アルジェリアおよびチュニシア方面では *foggara*, モロッコでは *jattara* と呼ばれていた。手順はと云えば、要するに、地下水が引き当てられる場所に穿孔していくことで、灌漑がのぞまれる田圃や、補給が必要とされる都市の高地へも水をとらえてこれを送流するゆるやかな勾配の通道によってつながり合うように工夫していたもので、適當の高处で、浸透性のある砂や含水の地層を通して、目的の耕地や都市部へ給水していたのである。マドリーの底土は、この種の方法に適していたことも思いあわされる。かようにして、ペルシヤには東方第一のナイサブル (*Naysabur*) の町が建てられ、アルジェ (*Algiers*) の南800キロのところには、11世紀に花と開き、やがて13世紀には見すてられていったサドラータ (*Sadrata*) の町がつくられたことを想起する。以来、現在まで砂漠の下に埋まっているこの町も、往時は多数の人口をかかえ、すばらしい緑の周辺をもっていたものだが、これはまったく以上に述べられた無数の穿孔につながる地下水道の賜である。さらに、愉快かつ興味のもたれることは、12世紀においてモロッコの首都で、たしかにイスパニア人の技師と思われるアブド・アラ・ベン・ユヌス (*Abd Alah ben Yunus*) なる男が、アルモラビド族 (11世紀の中ごろ、西部アフリカに大帝国を打ち建て、1093年から1148年まで、イスパニアをその領国にした民族) の君主の前で、この方法による水の導入の驚くべき証明を見せている事実である。ところが不思議なことに、いずれの地理学者も、オリエンタリストも、これがわがマドリーに存在したとは、誰も云っていないのである。だが、事実上、マドリーにもそれがあつたのであつて、原始集落の型態から都市に、また城市にと、発展変貌する可能性は、十分にこれを備えていたと、回教徒たちは信じていたに違いないのである。

以上に述べた回教徒に起源をもつマドリーの地下水導入の古来のシステムは、無論歴史家の研究の対象とはならなかったようであるが、これらは総じ

て、マドリーの名の由来をたずねる上には、やはり重要なことと考えられるのである。

次に、マドリーの水道に関連せる言葉を調べてみると、アラビア人や、その治下に混住していたキリシリ教徒たるモサラベの生活の様相を示す痕跡のあらわれているものがある。たとえば、

alcántara → alcantarilla (示小辞) 下水渠

は、残水処理の放水路、すなわち下水道の意味では使われておらず、もっぱら飲料水の導入管の意味に使われている。そこで、この alcantarilla の語は、一般に「橋、アーチ」を意味するアラビア語の al-qúantara からきたものではなく、地下天然の飲料水の水路を指称するものとして、alqúantara が考えられるわけである。東方的な匂いをとどめる他の例は、首都の北方に所在する地名 Canillas である。伏流水の量からいって、恐らくは、最も豊富な地帯と思われるが、その支脈に、はじめ Canilla (のみくち) の名を付けたものと思われる。つまり、Canillas の名は、もとアラビア語の aqniya 音からきたものの複数で、これはライムンド・マルティン (Raimundo Martín) のアラビア語辞典にも出ているのである。qanā の音でベルシヤの水道の意味としても通っている。

以上に水道に関する面から回教徒支配の時代のマドリーを回顧してきたが、その時代にあつて、実は、マドリーは二つの名を持っていた根拠が成り立つことを云わねばならない。一つは云うまでもなくロマンセ語で呼ばれ、もう一つはアラビア語で呼ばれていたもので、このことは、同時代のイスパニアの風土の二重的性格を理解すれば肯かれることであろう。

ロマンセ語を解していたものの命名は、西ゴード時代のもので Matrīce がすなわちそれである。ところが、モサラベたちは、e, i, o の前の c, k, o を口蓋化する習慣があつたので、彼らには Matriche と発音されて呼ばれていたものと想像される。その後、母なる原流 (arroyo matriz) たるマンサナーレス河の存在への意識が重なり、やがてそれが、マンサナーレス河に代つてア

ラビア人たちの事業に成る地下流水の導入が便宜をあたえるに至ると、モサラベたちは、個有単数の *matriz* から、回教徒たちがつくり上げた複数のそれを念頭に入れはじめ、ここで単数形の *Matrice* または *Matriche* は接尾語 *-it* をとり、集合名詞 *Matrit* (esp. *la ciudad de las matrices*) にかえられたものである。この接尾語は多数の觀念を含み、常に地形的性質の豊かな場所に付けられていたことが知られ、*Madrid* は *mediodía* からきたとするマヌエール・ゴメス・モレーノも、この点については見解を同じくしている。回教徒支配下のイスパニアの地名で *-it* で終るものはすこぶる多く、キリスト教側の資料にも、回教徒側の資料にも、これを見ることができる。それがあるいは、*-ite* にかわったり (*Tamarite*)、*-ito* に移ったり (*Villapalmito*)、また *-et* とか (*Miravet*)、*-ete* とかになったり (*Cañete*)、*-edo* や (*Aledo*)、*-ed* に変じたりしたもので (*Somed*)、同じく *-id* に変ったものが *Madrid* や *Embid* である。これらの接尾変化の源はラテン語の *-etu* にほかならない。すなわち、回教徒支配時代のイスパニアでは、たとえば *Fraxinetu* (*fresnedo*) は *Farajxnit* とあらためられて読み書きされたもので、これはラテン語 *-etu* が *it* と発音されたことによるが、同時にアラビア語の複数をあらわす *āt* が、あるところでは *it* と発音されていたことの混同をあわせ考えねばなるまい。さらに一例をあげると、マドリーに花崗岩を供給していた *Alpedrete* の地名がある。(以前は *Alpetrit* と云った。) これはアラビア語の冠詞 *al* とラテン語の *petra* の縮小辞の合成語で、その意味は、石の多くある *pedregal* (石ころ地) ということになる。

前述のとおり、回教徒治下のマドリーの呼び名は、アラビア人によるものとモサラベたちによるものとが共存していたのである。つまり、モサラベが *Matrit* と呼んでいたときに、アラビア人は *Macherit* と呼んでいたのである。この *Macherit* の名は当時マドリーを指す場合のすべてのアラビア語の資料にあらわれており、書き物などで相当に広く普及していたものと考えられ、したがって、それは現在のマドリーに対して最初に書きあらわされた名前と云えよう。しかし、言語学者たちを長く困惑させてきた *Macherit* の地名も、もとはと云えば、書くすべを得なかったモサラベたちによる *Matrit* が、その原意を

平俗にアラビア語に翻訳したもの過ぎない。というのは、要するに、Macherit は madre de agua または matriz を意味する machrà からできた集合名詞であることに気付かざるを得ないからである。地表を流れる河川であれ、地下流水であれ、ともかく machrà が上記原意の正確なる翻訳であることは、ライムンド・マルティーンの辞典にてらしても明らかである。

15世紀末にようやく民族待望の国土回復が成り、回教にかわってキリスト教が支配的となる時代が到来するのであるが、モーロ人のいた地方にしだいにロマンセ語が浸滲し、やがてそれが圧倒していく間に、アラビア語もすこしずつマドリーから後退していったものと考えるのは至極自然なことである。すなわち、この頃おい、この世から消え去り、また敗北せるものの常として、アラビア名 Macherit をもつマドリーは、その後にくるロマンセ語 Matrit のマドリーに完全に勝利者の席をゆずり、凱旋の地位をあたえるわけである。

むろん、Matrit の勝利も早急にはあらわれなかったのであって国土回復の後も二つの名は相競ったものと思われるが、ついに Macherit の名は、古典や公用語に記されるのみの、昔日の威望をとどめるに過ぎぬものとなっていく。公用語として名残をとどめたのは、ラテン語流に書かれていく場合と違って、異書される懸念がなかった理由に因ることである。

すでに、1190年にアラビアの科学を勉強するためにイスパニアにやってきた英国人のウィリアム・スタンフォード (William Stanfordt) も、マドリーに対してそのアラビア語名を使っており、また、マドリーに居住してペンを執って働いていた人々の中にも、ずっと後まで Macherit を使った連中が多かったようであるが、他方、その他の人々の間ではアラビア名をかえつつあったのである。同一土地に付けられた二つの地名からくる多少の混乱は当然まぬかれ難かったろうと思われるが、錯雑した様相はあまり残してはいないのである。聖王フェルナンド三世 (Fernando III el Santo 1199~1252) や賢王アルフォンソ十世のあつかいに見るまでもなく、13世紀の初期にはほぼ Matrit の勝利が看取され、事実、マドリー市当局の成文律中にも、キリスト教徒側による呼称、すなわち Matrit が41回も見えているのに対して、回教徒側による Macherit の

呼称は一度あらわれているに過ぎないのである。

その間、Matrit と Macherit が混用される場合もあったことから、この二つの地名の統一がもくろまれ、Macherit の ch が Matrit に入った結果、Machdrit の形もあらわれたが、やがて消滅していったことが知られる。他にも、当時ローマ人のたむろしていた近隣地区 Miaccum の名から思いついて Mageriacum とか、Maioritu とかの形が案出された形跡もあり、しかもこれがラテン語 maior と接近したことが考えられたことは、はじめにちよつと記したが、後者は殊に16世紀以来現在まで、種々と論議されてきたものである。

イベリア半島の中央に位するマドリーが首都に決定されるにいたった要因の一つは、何と云っても、ここにすばらしい水が豊富に存したことによるもので、当地の技術家たちの勧告や意見がフェリーペ二世の決意を容易にし、最も偉大なる帝国の首都として選ばせたものと考えられる。同じく好位置にあり、しかも有為なるべきはずのトレードが残され、マドリーの地が選ばれた事実も、マドリー自身の名がそれを示していることである。事実、フェリーペ三世が再びこの地に首都を移して以来の新市の特異の発展的推移は、まったくその供給水量によることは明らかであつて、あらたな行政機関がもたらせた澎湃たる当時の官僚社会の波にしたがつて異常なる人口の増加を見たものである。

回教的環境の古い遺物としてあつた市内外の庭園、畑、果樹園などの多くが、その前進の前に消えはじめ、日に日に家が建ち、市街は急速に膨脹してしたのである。その状況は、古典作家ことにロペ・デ・ベーガ (Lope de Vega 1562~1635) などの作品にも見られるのであつて、前日“水と花”の見られた場所に、夜明けを迎えた時には、家が建ち並んでいた、といった具合の描写が、いかにも當時を写して余りある。

新市の発展にともなつて水道技術者の活動が目立ち、水道の復興と拡張のためニコシア (Nicosia) 生れの一外国人技師が、招かれて市長の宅に2年間客となつてこの問題に當つたがうまくいかず、結局、父子相伝の技術をもつていたマドリー在住の親子らしい2人の技師と、カルメル会の托鉢僧が協力してその事業を仕遂げたことなども、市の古い資料からわかつたことであつた。前者の

名は、フアン・デル・リオ・エル・ビエッホ (Juan del Río el Viejo) とフアン・デル・リオ・エル・モソー (Juan del Río el Mozo), 後者の名はアルベルト・デ・ラ・マードレ・デ・ディオス (Alberto de la Madre de Dios)。

16世紀から17世紀へと時が進んでも、マドリーの発展方向が一方の側面、すなわち北、北東、東の方向にしかふくれなかったことは、東方的システムたる地下水路の裏づけとともに注目すべきことである。

イータ (Hita) の司祭で14世紀における最高の詩人、というよりも小説「よき恋の書」 (Libro del buen amor) の著者として有名で、トレードの大司教ドン・ヒル・デ・アルボルノース (don Gil de Albornoz) の命令で13年間も幽閉されたことのあるフアン・ルイス・デ・アラルコン (Juan Ruiz de Alarcón) の言に「マドリーは、水ではベネチア (Venecia) をもあざむく。」とある。仰々しいが、その繁栄を誇示した自負の裏にも、ひっきよう叙上の秘密が存していたことが知られるわけで、マンサナーレス河が馬で渡れる世に遭っても、尽きざる泉源を地下にもちつづけていることは、それが一種の湖沼都市であることを証していると云えよう。

それにしても、利便のとどこぬ高原を下りて、マンサナーレス河の畔に、なぜに都市づくりがはじめられなかったかは、古来の不思議である。今日でも、建築家フェデリーコ・チュエカ (Federico Chueca) が、その名著「マドリーの相貌」 (El semblante de Madrid) で述べているとおり、それこそ了解し難き、奇異なることなのである。なぜ、河まで近づいてマンサナーレスの涼を求めなかったものか。しかし、実際は、この問題は誰も了解しえないだろう。この都市の存在のはじめに溯って推測されることは、謎という一言で足りるのである。遠く、きつすいのマドリッ子たりしロペ・デ・ベーガも、その不可思議にして特異なる姿を、

que tiene y no tiene río,

que está en alto y no está en alto,

que tiene y no tiene frío.

(河があつて河のなき,

高きにあつて高きになく、
寒くしてまた寒くなき)

とうたっている。

ともあれ、マドリーの存在理由について、何人もこれを理解しえなかったものなら、その名の意味が一つの神秘に属していたといつても過言ではなさそうである。ロベ・デ・ベーガが「高きにあつて高きになく」と云ったことも水利の問題の解決によって、理解することができる筈であり、しかもその水というのは、マンサナールス河の水にあらずして、土地自体にひそむ水に関するとは、前に述べたとおりである。

かつて19世紀の地理学者ゴバンテス (Govantes) も、首都の起源について、ラテン語 *matrice* 説をとったし、また、18世紀のアラビア語学者カシーリは、*Macherit* 説を支持して、それは “*aquaeductum et curriculum*” (lat. 水道と路線) の意味のアフリカ音を示すものであると主張したが、結局のところ、*Madrid* はすなわち “*madre*” であると考えられる。換言すれば “*madre de aguas*” (水流の源) なのである。が、それは同時に、国家的盛望を担って立っていたイスパニアにとっての “*madre universal*” (万有の母) であり、しかしそれは “*madre del mundo*” (世界の母) を意味し、また、 “*madre de todo lo bueno*” (すべて善なるものの母) を暗示し、かつは ロベ・デ・ベーガのいわゆる “*madre de las ciencias*” (学問の母) の觀念も内包していたと考えることは正鵠を失しないであろう。

マドリーのもつ地名について、決定的に容認された見解かどうかは、要は今後にまつものがあるだろうが、ここに示された概要 (“*Arbor*” tomo XXVIII, 1954 所載) のほんの概要からも、ハイメ・オリベール・アシンの見方、考え方は十分にこれをうかがうことができると思う。

つまり、音声上の単なる推測によってその名を探ることをせず、語源に関する文献の分野のなかで、地名研究 (toponymy) に地勢学 (topography) を接触して考察を進めていることで、その点でははなはだ興味の持たれることであ

る。古い時代のマドリーの地名の二重命名の現象を明らかにしていることも特長的である。異民族との接触面の多かったヨーロッパのなかに往時をおもうならば、それは、考えに入れるべき事項であろう。たとえば、イスパニア北岸にあるギプスコア (Guipúzcoa) の首都の場合も同様であって、イスパニア語をしゃべる人たちは San Sebastián と呼び、バスク語をしゃべる人たちの間では Donostia と呼ばれていたもので、これは、すなわち、バスク人たちが san (または santo) の代りにつかう dominu からきた don と、Sebastián のバスク語による呼び名 stía との合成語であることは知られるとおりである。一方が文字をもった多数人の呼び名であるのに対して、他は、少数人の口の端にのぼるにすぎない卑俗なる呼称であつたことも併せ考えていいことである。

多少趣を異にするが、ここで想起されるのは北海道の地名である。周知のとおり、原住民たるアイヌの命名によるものが多いのであるが、それらは、アイヌ語の原音に漢字の音をあてたものあり (シントコー新得—シントク)、訓をあてたものあり (ピロウ—広尾—ヒロオ)、音訓をあわせあてているものあり (タイキー—大樹—タイキ)、また、原意の意識を漢字に現わしたものもある (ペケレペ—清水—シミズ) といった具合で、しぜん「鹿越」と「幾寅」などのごときアイヌ原語ユクトラシベッに由来する訓字と意識による二重命名の現象もありえたわけである。地名探究の要点につながる意味では、興味のないことでもあるまい。

ひっきよう、地名は常に歴史である。マドリーについては、ことに、その名は歴史の浮彫のようなものである。しかも、ラフォ (Rafo) およびリベラ (Ribera) 両技師の努力の結果、はじめて、グェダラーマ山脈に発するロソーヤ (Lozoya) の流れがこの地に達した19世紀にいたって、Madrid の名はその語源的意味の現実にこたえなくなつたと考えるならば、マドリーの歴史にひと区切りを打つたものといえよう。依然たる謎を秘めつつも。